

《 論文 》

地方国立大学生の「親の介護」意識と地元就職との関連

— 「イエ」意識に焦点をあてたインタビュー調査からの分析 —

Relationship between Local National University Students' Consciousness
of "care of parents" and Local Employment
- An Analysis from an Interview Survey Focused on "Ie" Consciousness -

富江 英俊
関西学院大学

Hidetoshi TOMIE
Kwansei Gakuin University

Abstract

In this research, the students of the faculty of teacher training of the local national university have a consciousness with respect to the "parent care" that may occur in the future, how it affects the employment place after graduation from the university And analyze it and consider what kind of consciousness the family members who are positioned as careers of nursing care have associated with the "Ie" system.

The research method is an interview survey targeting fourth graders of university students in non-metropolitan areas.

In the previous research based on the questionnaire survey, the young generation got a result that the normative consciousness of "wanting nursing parents" is high. Likewise, a clear norm consciousness was found in this survey. Because of that, many people finished employment after graduation, returning to the local area, that is, "making U turns".

There is a person who has a traditional awareness that the eldest son, the eldest daughter, preserves the wealth of the family, consciousness to "Ie" including "Parent's care". On the other hand, there was also a person with a contemporary "Ie" consciousness that emphasized connection with a heart-like family that "someone of siblings will stay locally".

Because university students belong to a rich hierarchy, it is difficult to generalize this result. However, this result gives one suggestion when thinking about ways of future welfare. Given the development and survival of the future non-metropolitan area, it is not a bad thing for teachers who are "rural elite" to return to the local area. When considering

welfare and nursing care methods, there are many criticisms of familism, but it is important to consider what kind of family relationship is.

Key words

parent care, non-metropolitan areas, family

はじめに

本研究は、地方国立大学の教員養成系学部の学生が、将来起こる可能性がある「親の介護」に対してどのような意識を持ち、それが大学卒業後の就職地にどのように影響しているかを分析し、介護の担い手として位置づけられる家族について、どのような意識を持っているのかを「イエ」制度と関連付けて検討していくこととする。

日本の福祉レジームについて、エスピン・アンデルセンは「家族主義」という特徴があるとした。様々な福祉サービスが市場原理に任される自由主義でもなく、国家が提供する社会民主主義でもなく、育児や介護といったケア労働は、家族がやるべきものだと言われるのが「家族主義」である（新川 2011）。1990年代以降、家族の急速な変化のもとで、育児は保育所で保育士が行う、介護は介護保険制度のもと特別養護老人ホームなどの施設で介護関係の資格を持つスタッフが行う、といった「ケアの社会化」を推進する政策が打ち出されたにもかかわらず、今日までこの傾向は続いているとされている。

この家族主義を、「改革の遅れ」ととらえ、「欧米諸国のように、国家や市場の役割をもっと大きくすべきだ」という意見もあれば（落合 2015）、「今後も、家族での子どもや要介護高齢者の日常生活の世話という直接的なケアを、家族は担っていくことになる」（下夷 2015）といった、積極的な価値判断は示さず、家族の役割が完全になくなるわけではないとする論調もある。

本研究では、地方国立大学の4年生を対象としたインタビュー調査を行い、卒業後の勤務地としてどこを選んだのかという観点から、進路選択をするにあたって家族への意識、とりわけ親の介護への意識がどれだけ影響しているのかを考察していくこととする。その際に「家族」をどうとらえるかが重要になってくるが、「家族」に近接する概念として「イエ」という概念を用い、分析を行うこととする。

1. 分析の観点 — 「イエ」と「家族」をめぐる議論 —

（1）現代的イエ意識

最初に「イエ」とはどのようなものかを押さえる。本研究では、若者論研究の一環として、青森県の18歳から29歳までにインタビュー調査を行った羽渕(2016)をベースとした。羽渕は、「イエ制度」について「家長の統率のもとに、家産にもとづいて家業を営み、非血縁者をあとり養子にしてでも、先祖から子孫へと世代を超えて家系が存続繁栄することに重点をおく

制度」として、このイエ制度について、形態そのものの研究はあるもののこの形態を支える意識、精神性といったものはあまり研究されていないとしている。そこで、青森県の若者を対象としたインタビュー調査を行い、その意識を考察するとしている。調査の仮説として、「イエ制度は前近代性を強調される」が、イエ意識は「単純に近代化が進めば、消失していくもの」ではなく、「イエ意識と類似する家族集団を支えるメンタリティ」が存在するという点を挙げている。調査結果は、おおむねこの仮説の通りであった。第一次産業従事者は減っているので、職業の基盤となるようなイエの財産を有している家庭は少なく、その点ではイエ制度についての意識は希薄化したと言える。しかし、現在の若者は、親との関係性とのなかで、例えば「親の世話をする」ということなどから、「イエを継ぐ」という意識を持っている、「旧来的なイエ意識とは全くことなるものであったとしても、親子の関係を家系の連続性として意識している」と結論付け、これを「現代的イエ意識」と名付けている。

「イエ」とは何か、「家族」とどう違うのかという点がやや不明確であることは否めないが、羽瀨の指摘で重要であるのは、「イエ」が「前近代的」とされ否定的なレッテルを貼られ、評価される機会に恵まれなかったことを、間接的にせよ指摘した点である。

(2) 地方の若者が親と同居する実態の解釈

一方で、地方（非大都市圏）を対象とした若者研究において、非正規雇用のため収入が不安定な若者が、生計を成り立たせるために、親と同居せざるを得ない、というパターンがよく指摘される。宮本（2017）は、東北地方を対象とした調査で、三世代同居の慣行が今日まで残っているが、「親子関係に関する伝統的な規範はこの間に明らかに弱まって」おり⁴、「地方経済の悪化が子ども世代だけでなく親世代を直撃した」ため、親からの援助が乏しい中でも、居住形態としては同居なのである。宮本はこの状態を、「若者が自立するのが遅れている」と否定的にとらえ、若者が経済的に自立することを支援する政策の必要性を述べている。

少々雑な議論になるが、非大都市圏である東北地方の若者の意識や現状について、羽瀨も宮本も、分析対象としたのは、おそらく同じような非大都市圏の実態であったであろう。しかし両者でかなりトーンが違う結論となっているのは、もちろん分析の観点が違うということも大きいですが、「若者個人と家族という集団」の関係性がいかにあるべきか、という価値観が違うことが大きいのではないかと。調査対象者が「イエ」についてどのような意識を持っているか、それが介護や福祉の場でよく登場する「家族」「家庭」という概念と、どこまで重なり合って、どこが違うのかが重要な点である。

2. 家族の介護についての意識の先行研究

つづいて、「親の介護」意識に対する質問票調査を行った先行研究を取り上げ、本研究での調査につながる知見を考察することにしたい。大学生を対象として調査した研究として、細江（1987）がある。首都圏の4年生大学7校の577名にアンケート調査を実施して、分析している。親の介護についての意識は、「なにをおいても世話をする」「どうするかわからない」「お金を払

って人を頼む」「施設に入れる」の選択肢から択一で聞いているが、「なにをおいても世話をする」は64.6%、「どうするかわからない」は28.2%、「お金を払って人を頼む」は4.1%、「施設に入れる」は3.2%となっている。親を世話するという規範が強い結果となっている。どのような者が介護しようという意識が高いかについては、家族生活に満足しているといった情緒的な要因が大きく、出生順位はあまり関連がなかったとしている。

全国の成人を対象とした質問票調査のデータを使用し、介護に対する意識を分析したものが、中西(2011)である。この調査は、日本家族社会学会が実施した「第3回家族についての全国調査」で、2008年度に実施された。住民基本台帳に登録されている28～72歳の者からサンプリングを行い、9,400人のうち5,203人から回答を得たデータであるⁱⁱⁱ。この調査の質問票には家族についての規範意識の質問が9つ用意され、そのうちの 하나가「親が寝たきりなどになった時、子どもが介護するのは当たり前のことだ」である。4件法で聞かれているが、「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」が64.9%、「どちらかといえばそう思わない」+「そう思わない」が34.2%であった^{iv}。約2/3の者が親の介護を当然視するといえるわけで、それを個人の属性でどのように異なっているのかを中西は分析した。中西は、家族についての規範意識の質問項目から「老親扶養規範」の変数を作成し、それが個人属性によってどのように強弱があるかを、表1のように示している。

表1 個人属性と老親扶養規範意識との関連

規範意識	高	低
性別	男性	女性
本人年代	20-40代	50-70代
学歴	大卒	大卒以外
配偶状態	配偶者無	配偶者有
母年代	母が74歳以下	母が75歳以上、母無し
親同別居	親同居	親別居
就労形態	自営業・家族従業・常勤雇用	臨時雇用・経営者・役員
子の有無	子無し	子あり
きょうだい構成	長男・長女	次三男・次三女
都市規模	10万人以上の市以外	10万人以上の市

注：中西(2011)より作成

表1にある傾向の解釈として中西は、現実感や切実さが相対的に低い人の方が、規範意識が高い。そして、配偶者がいたり子どもがいると規範意識が下がるのは、定位家族と生殖家族が競合し、生殖家族が優先されることを示していて、老親介護は「状況適合的」「ご都合主義的」^{vi}であるとしている。

以上、細江と中西の分析結果をみたが、この知見から本研究の調査につながる推測をするならば、大学生は高い規範を持っていることが予想できる。細江の調査では、今日との時代の違いを考慮に入れるとしても、「施設に入れる」の選択肢を選んだものは、かなり少ない。中西が規範意識が高いと分析した個人属性のうち、「20～40代」「大卒（厳密には「大卒見込み）」」「母が74歳以下」「子無し」はほとんどの大学生にあてはまるであろう。この調査の対象者は28歳以上なので、大学生はほとんど含まれていないが、もし大学生を対象に調査をしたら、規範意識がより高く出てくることは、想像に難くない。これについての検証は、本稿の最後に行う。

3. 本研究における調査の意義と概要

このような先行研究をふまえて、本研究ではインタビュー調査を実施したが、その調査の意義と概要を、調査対象者の基本的なプロフィールをここで述べる。

(1) 地方国立大学生の卒業後の進路に焦点をあてる意義

本研究で調査対象とするのは、地方国立大学の教員養成系学科の4年生である。調査対象者の大半が小学校教員や保育士ⁱⁱⁱとなって、教育や保育の現場で働く予定をしているが、非大都市圏において、地方国立大学が存在する意義、教員という職業のステイタスについて確認し、本研究の調査の性格について述べる。

今日の日本の高等教育機会の構造として、4年制大学が大都市に偏在しているため、若年人口が大都市に向かうことが多く、卒業後もそのまま大都市に居住するというパターンも少なくないため、この高等教育機関の大都市偏在が非大都市圏の若年人口流出、すなわち家族の変容を促す原因の一つとされている。とりわけ入学試験において難易度が高い大学ほど大都市にあり、その学歴に見合うような収入や地位がある勤務先も同じく大都市に集中している。以上から、非大都市圏においては、「優秀な人ほど流出し、卒業後も帰ってこない」という構図が出来上がっているのである（朴澤 2016）。このような全体の構造のなかで、「地域密着の専門職」「ローカリティ性が強い」とされる職業が教員である（天野 1986、吉川 2001）。全国の津々浦々の人々に必要なもので、彼らを養成する国立大学の教育学部は非大都市圏に多く存在する。教員という仕事は、社会一般においてステイタスの高い仕事だとされており、阿部(2017)は、地方圏（非大都市圏）の家族を、安定就業世帯、多就業世帯上層・下層、自営業を主とする世帯、その他世帯（リスク世帯）5類型に分類した。安定就業世帯は「父親が公務員、教員、大・中規模企業社員、母親は専業主婦・パートか教員・公務員で、地方では恵まれた条件を有する世帯」としている。

非大都市圏での若者を対象とした他の調査結果においても、教員は人気の職業として描かれている（轡田 2017 など）。転勤があるとしても県内だけであり、その県内で一生を過ごそうとしている者には、県庁や市役所などの地方公務員、地方銀行などと並んで人気の高い職業である。いわゆる「大企業」は非大都市圏には少なく、相対的に地位や収入が高い、何よりも安定しているという意識が強いのである。

以上のことから、地方国立大学を卒業して、教員になる者は、社会階層という観点からすれば上層に位置しており、若者の全体像からすれば偏った事例とはいえる。それは、本調査の弱点ともいえるが、アンケート調査を行った先行研究からの知見も取り入れ、「社会階層の上層に位置する者」の特徴であると認識した上で論理展開を行えば、意義のある研究となると考える。

(2) 調査の概要と調査対象者の主な属性

続いて、調査の概要を説明する。調査する都道府県としては、鳥取県を設定した。鳥取県は、県内にある4年制大学は3校のみである。これは47都道府県のうちで、鳥根県、佐賀県の2校に次いで少ない^{viii}。そのため非大都市圏の典型的な県とみなせる。鳥取県で主として教員養成を行っているのは、地方国立大学の鳥取大学である。いわゆる教員養成系学部・学科として現時点で存在するのは、地域学部地域学科人間形成コースであるが、2017年度に改組される前は地域学部地域教育学科であった。

本研究における調査は、2017年度に鳥取大学地域学部地域教育学科の4年生であった9名を対象とした。地域教育学科の入学定員は49名、2014年4月の入学者は55名で、そのうち2018年3月に卒業した者は51名で、この母集団のうち、「保育・教育実践演習（幼・小）」の受講者から、ランダムサンプリングを行い、対象者を決定した。この科目は教員免許取得に際しての必修科目であることから、対象者は教員免許取得予定者（そのうち多くが教員となる）に限られることになる。

調査時期は2017年11月～2018年2月で、調査方法は半構造化の質問によるインタビューで、1人あたり30～40分程度行った。質問項目として、家族構成や出身地などの属性、大学進学理由や将来の進路希望などに加えて、「親の老後は、子供が面倒を見るべきだ」という考え方についての意見』『家』『土地』『お墓』などは『跡取り』が継ぐべきだ」という考え方についての意見」を挙げておいたが、インタビューの流れで必ずしも質問が出来たわけではない。

なお、インタビューデータを表記する際には、以下のように行った。

<インタビューデータの表記について>

- ・調査対象者は、A～Iと示す。各対象者の属性などは、表2のとおりである。
- ・インタビューは「私」と記している。
- ・都道府県名や大学名で固有名詞が出てくる個所は、
 <地元の県の国立教育学部>といったように記している。
- ・「地元の県」という場合は、出身の都道府県を指すこととする。

表2が調査対象者の主な属性と大学の志望理由である。この内容を、解釈も含めてまとめておこう。まず性別であるが、男子が2名でサンプル全体に占める割合は22.2%となった。これは、2016年度に鳥取大学地域学部に入学した学生のなかで男子が占める割合の46.4%（97名/209名）に比べると少ない。これは、調査対象者を一定数確保するため、性別は考慮できな

ったためである。続いて出身地であるが、鳥取県内の出身者は、1名（I）で、鳥取県に隣接する県の自宅から通学している者が1名（H）で、あとの7名は自宅外生であった^{ix}。この原因としては、地方国立大学のなかで入試難易度に明確な序列があるため、自分のセンター試験の成績で入れる、教員養成系学部・学科がある地方国立大学を探したら、鳥取大学になったという回答が多かった。「大学入学時の地域移動」が研究課題や政策課題にされる時は、「非大都市圏から大都市圏へ」が注目されがちであるが、「非大都市圏から非大都市圏へ」という移動も当然あるわけである。自宅外生の地元は、全員が中国地方か近畿地方の県であった。

＜ 表2 調査対象者の主な属性と大学の志望理由 ＞

名前	性別	出身地・自宅所在地	家族構成	親の職業	大学の志望理由
A	女	近畿地方。地方都市だが、自宅から通学可能な大学はかなり限られている。	両親	父は工場勤務、母は保険会社	自県内の国立教育学部を勧められたが、にぎやかなところの生活は疲れると思ったので、鳥取を選んだ。「大学生になったら一人暮らしをする」というのは当たり前だった。
B	女	中国地方。県庁所在地だが、中心部までは遠い、のどかなところ。自宅から近いところに、自県の国立大学はあったが、県内に大学は少ない。	祖母、両親、弟、妹	父は会社員、母は介護士	親から「あまり遠くに行かないでほしい」と言われていて、地元の国立大学を強く勧めていた。地元か隣県の国立大学に絞られて、取れる資格や入試科目を考慮すると、隣県の大学となった。
C	女	近畿地方。地方都市で市内に大学がある。京阪神にある大学の一部にも、ぎりぎり通えるような距離。	両親、兄、姉	父は会社員、母は工場の社員	遠くの大学に行きたい、親から離れたいという意識があった。別の国立大学が第一志望であったが、センター試験の結果を見て、鳥大にした。
D	男	中国地方の都市。新幹線の駅がある。自宅はJRの駅から近い便利なところ。	両親、妹、弟	父は高校教員、母は小学校教員	実家から離れたいという思いは強かったが、大都市の私学は家賃や学費などを考えて選ばなかった。センター試験の結果で鳥大にした。
E	男	中国地方。町自体は田舎だが、家は駅からすぐ近くで便利なところ。	両親、妹。	父は民間企業、母はパート	東京や京阪神の私学に行くなら、経済学部系に行きたかった、国立なら教育学部と決めていて、後者になった。
F	女	近畿地方。県庁所在地から離れていて、4年制大学に自宅から通学するのは不可。	両親、姉。	母は、小学校の支援員と、自分の書道教室、父は無職	小学校免許が取れる大学を考え、センター試験の点数があまり良くなかったため、鳥取にした。地元を出てみたいという思いは強かった。
G	女	近畿地方。住んでいる市町村はのどかなところだが、電車で30分程度行くと、地方都市があり、4年制大学もいくつか通学できる。	両親、妹2人。	父は小学校教員、母は医療事務	隣県の国立教育学部が第一志望であったが、センター試験の点数が足りなかった。浪人する気はなかった。私立も受け、そこしか合格しなければ入学するつもりだった。
H	女	鳥取大学へ通学可能な場所。	祖母、両親、姉	父は郵便局、母は看護師	現役の時も浪人の時も、中国地方の国立大学を目指していたが、センター試験の点数が足りなかった。
I	女	鳥取市内。	祖父、母、姉、妹（父は病没）	祖父が会社経営、母はその会社の経理を担当	医学部を目指していて、仮面浪人をするために入学した。「家から通えて、免許が取れる」ということで、母に薦められて入学した。

自宅外生であるということは、住居費や光熱費などの費用が当然かかるわけで、それに耐え得る家計であることが予想される。親の職業やきょうだい構成からそれをみていこう。親の職業は、父親の職業は、会社員と教員（に準ずるようなもの）とがおおよそ半々くらいであった。そして母親も全員が働いていた。フルタイムか否かはわからない者もいるが、ある程度の経済力はあるといえよう。

家族構成であるが、きょうだい構成は、1名が一人っ子で、他の者は2人か3人きょうだいである。地元の住居での、祖父母との同居は3人であった。きょうだいや祖父母の影響は、「イエ」「親の介護」を考える時、重要なキーとなる。のちに考察する。

そして、卒業後の居住予定地であるが、自宅生の2名は、そのまま地元に住居する。あとの7名のうち、地元でUターンするのは5名、鳥取に止まるのは1名、関東地方の大学院に進学するのは1名となった。これは統計的に語れるような数値ではないが、Uターン者は多い。どのような業種に就職するのかについては、調査対象者9名のなかで、教職に就かないのは1名だけであった。なお、2007年度～2015年度の地域教育学科の卒業生のうち、教員・保育士になった者の割合は60%であるので、それより本調査の対象者は、教員就職率が高い。

そして、以下の分析における大まかな原則として、2名以上から同じような回答があった内容を中心に行っていくこととしたい。1名からのみ回答があった内容と、2名から回答があった内容とで、一般性や代表性が大きく変わるわけではない。しかし、1名からのみの回答内容は、その個人のみにかかわる特殊な事情が影響している可能性があるため、このような基準によって回答を整理することとした。

4. イエ意識の事例

(1) 祖父母世代からの明確な「イエ意識」の伝達

最初に、祖父母の世代から明確に「イエ意識」を伝達されたDとIの事例を検討する。

私：長男だから、介護とか家、土地、墓をある程度意識されているという。

D：祖母がまだしっかりしていた時には、家を継ぐんだぞみたいな話をいっぱい受けてましたね。両親が共働きというのもあって、だいぶ育児の方とかを祖父母の方に委託していた関係もあって、小学校の低学年ぐらいまでは、祖父母からもろに影響を受けてましたね。で、その時にね、もう家の話だとか、分家のポジションなんだよとか、こういう地域に住んでるんだよとか。お墓のどこにも連れて行かれました。ここには誰々の墓があって、こっちに親戚の墓があって、っていう話をもう墓参りの度にしきりにされていたので、もう染みついてますね。おそらくその家の意識っていうのも僕の中で強いんだと思います。ちょっと嫌だなと思いつつも、小さい頃から受けているので。あんまり僕としても好きじゃないけど、仕方ないのかなと思います。

私：なぜ（就職先として）鳥取がいいと思いました？

I：小さいころから、亡くなった祖母から「うち三姉妹だから、お嫁に行っちゃったら、誰もあと継ぐ子がいないじゃない、だから誰もお嫁にやらないよ」っていうのをずっと言われ続けてきたので、そういう刷り込み見たいなものもあって思いました。「お嫁に行っちゃいけないんだ」っていうのは、私はちっちゃいころから周りには言っていました。

私：お祖母さんが一番そういう意識は強かったということですね？

I：母と祖母ですね。

私：お母さんも同じようなことをおっしゃると？

I：父は亡くなったんですけど、父は婿養子だったんで。

私：会社経営は、誰かが婿養子取って、会社を継いでもらえればな、ってそんな感じですか？

I：あーでもうちはあくまでも、誰かではなくて、みんなお嫁にあげたくないっていう考え方で。

私：みんなお嫁にあげたくない？

I：もし行ったとしても、お姑さんとは絶対暮らしちゃだめよ、という条件がついたりとか。お婿さんもらって、誰かは今ある家に住むっていうので、あとの2人は別々の家で、〇〇姓（Iさんの姓—引用者注）を名乗ってくれたらな、みたいな、言われてて。跡取りが継ぐべきだとは私は思わなくて。

Dの両親は教員であるので「家業」ではないのだが、「お墓」などを通して「イエ意識」を明確にしたことがうかがえる。Iの家は会社経営という「家業」があるが、その跡取りということに加えて、自らの苗字（姓）を誇りとしており、婿養子しか考えていないという、はっきりとした「イエ意識」と考えてよいであろう。DとIの共通点は、「小さいころから祖母に言われて刷り込まれた」ということで、言わば「2世代上が持つイエ制度の価値観をしっかりと内面化した」といえよう。

（2）「きょうだい誰か一人残る原則」のUターン

本調査において、対象者の半分以上が「Uターン」という進路となっているが、その理由としては、「親の意向」というものが目立った。しかしその文脈は、「イエ制度の跡取り」とはやや違うものである。他のきょうだいがすでに地元を出ているので、自分は残ろう（Uターンしよう）と考えたということである。これを「きょうだい誰か一人残る原則」と名付ける。B・C・Fの回答がこれにあたる。

私：卒業後の進路は？

B：<地元の県>で保育士になります。鳥取でもいいかなって思ったんですけど、両親から約束が違うぞって言われて。長女なんで帰って来てくれんと困るって言われて、で、<地元の県>で。弟が単身赴任系の仕事についてるので、高校卒業してからすぐもう就職したの

で、私が家の近くに来てくれた方がうれしいっていう話はされてて。で、弟はもう家には帰らないって言ってて、妹も今大学生なんですけど、もう<地元の県>には帰らないって言うてるので、私が帰らんとなくなっていくのは思ってた。

私：自分でも納得したと？

B：納得ですね。普通男の子が継ぐもんだろって思ったんですけど、でもまあ長女だしなと思って。

私：親の介護、老後、家、土地、お墓だとかはBさんが意識してらっしゃると？

B：やらんといけんかなと思ってんですけど、まだ家を継ぐっていうのがどんなもんかっていうのをイメージつけてないんで、学生なんで。これから考えんとなとは思ってるんですけど、私が継ぐっていうのは頭の中にはあります。

私：親の介護とか、イエ制度について。

C：今、兄も姉も結婚して実家から離れているので。それもあって家に帰らないとなっていくのはあったんですけど、跡取りとかはなんか絶対兄がしないとけないのかも考えていないです。

私：親御さんはあんただけでもいいから一時的にでも帰ってきてくれとかそういうのが？

C：ありました。

私：それは3人とも出て行ってしまったら寂しいとか？

C：うーん、寂しいと。

私：親御さんの希望もあったということですね。

C：はい。

私：将来、配偶者にくっついてついていくかもしれないけど、場合によっては親のそういう、お兄さんとかお姉さんも遠くだとかだったら、今よりかはある程度は重視して将来を考えようとか？

C：そうですね、ちょっとは考えますね。そこまで重視しないかもしれないですけど。親が病気とか、介護が必要になった時には離れられないと思います。

私：ごきょうだいの間でも、そんなことになったらお前がやれとかそういう話も？

C：いや、だれがやれの話はないですね。そうなったら3人でやっていこうっていう話です。

私：親の介護や、イエ制度について、お姉さんがどういう風にお考えとか、姉妹やご両親でどういう話をしているとか、お願い出来ますか？

F：たぶん姉は、関東に出て、帰ってこないと思うんです。今まで母はそういう話、家のことについてとか、あんまり言ってこなかったんですけど、去年の夏ぐらいに「お祖父ちゃんとお祖母ちゃんの家があって、それはお墓の面倒を見てくれる人に渡す」みたいなことを母が言ってて、それを聞いてお姉ちゃんが「じゃあ、それは妹だな」って言ってて。だからたぶん、「家を継ぐ」って言ったらあれですけど、私が地元に来て、っていう風になるんだと思います。

BとFの回答のなかに「家を継ぐ」と言っていて、Fには「お墓の面倒」という言葉もある

が、前節でみたような「2世代上」の祖父母のような強烈なメッセージではない。Cの事例がある意味で典型的で「きょうだいのなかで一人は地元にいるべきだ」という規範意識を受け入れて、地元で就職するという構図である。

(3) 地域移動とつながらない「介護」「イエ」についての意識

次に、就職先と直接は関連しないが、「介護」「イエ」に言及した事例をみる。Gは、本調査の対象者で、唯一自宅外生で鳥取に止まる者である²⁾。Eはどこに住もうが、介護や家のことはやるという意識である。

私：3姉妹の長女でいらっしゃるのですが、家・土地・お墓についてはいかがですか？

G：やっぱり、私が就職するってなった時に、＜地元の県＞じゃなくて鳥取にしたので、長女っていうのもあるんですけど、＜地元の県＞から出ちゃうから、親と離れるので、親もちょっと寂しいという気持ちも、特に母親はあったので、それは申し訳ないっていうか、妹にも申し訳ないなという気持ちはあります。

でも、親は基本は私の好きなようにっていうか、私の意見を尊重してくれる親なので、結構親とも話し合ったんですけど、鳥取にするというので納得してくれて、老後ってなると、親が介護とかが必要になったら、私は介護したいと思います。けど、今からのことを考えると、距離的に離れているので、すごい頻繁に、毎日介護するとかは厳しいのかなと考えてます。けど、もし妹とかも県外とかに出で行っちゃって、本当に誰も面倒を見る人がいないっていう状態になったら、私が一人ででも帰って、面倒を見たいですね。施設にポンて放り込むのは嫌だなと思います。

実際、親の介護をしていて、子どももしんどくなるのはよく聞くので、しんどいんだろうなというイメージはすごいあります。けどやっぱり今まで育ててくれたので、親が困っている時は助けたいなと思います。

私：小さいころから言われたことはないのですか？

G：そうですね。これしろとか、それをしてはいけないとかは言われないうえ。

私：言われないうえ、考えると。

G：そうですね。

私：親の介護とか、家・土地・お墓とか、いわゆる「跡取り」、そのあたりはいかがですか？

E：長男だから、介護とか、家のことをやるんだなという意識はありますね。それを妹とか両親とかと深く話す機会はなっただけです。だから、僕が勝手に考えているというだけなんですけど。妹がたぶん＜地元の県＞を出るんです。大学も関東に行っているんで、そっちの方で就職するので。僕は＜地元の県＞に戻るんで、僕になるのかなど。

私：だから、鳥取でなくて＜地元の県＞、全国転勤のある企業でなくて教員にしたということですか？

E: いや、それは後付けです。僕が長男という意識が強いんですね。僕がどこにいても世話をするという意識はあると思います。母方の祖母が僕が大学に入る直前に亡くなって、母は次女なんですけど、母が家の引き払いとか葬儀、墓の管理とかをすごいやって、長女が世話をあまりしない人なんで、色々と問題になったということが、反面教師になって、長男としての意識を強くしました。

Gの事例は、地元を離れて鳥取で生活するが、きょうだいみんな県外に出れば自分が介護を可能な限りするという意識を持っている、ということである。Eは地元に戻るという選択をしたが、どこに住んでも世話をする、家のことをする、という意識は持っているとしている。

なお、AとHはインタビューデータを取り上げなかったが、「親が家や介護のことについてあまり関心がなく、自分自身もあまり意識せず進路を決めた」とのことであった。

4. 結語

以上、地方国立大学の「イエ」「親の介護」についての意識を考察してきた。全体として、「イエを継ぐ、守る」「親の介護をする」という明確な規範意識がみられた。それを理由として卒業後の就職先は地元に戻る、すなわち「Uターンする」者が多かった。すなわち「親の介護」と「地元就職」が強く関連しているのである。

しかし、親との同居・近居は必ずしも考えていないとか、家を継ぐ長子が介護を担うとか、伝統的なイエ意識ともやや違った、「きょうだい誰か一人残る原則」という面も見られた。これは、羽瀧が描いた「現代的イエ意識」とおおむね同じような意識であると考えてよいであろう。

また、先行研究による親の介護に対する意識の調査結果とも、おおむね整合性があると考えられる。若年層、未婚、高学歴（大卒）の者ほど老親扶養意識が高いというアンケート調査の分析で、本研究で調査対象者になった大学生は「若年層」「未婚」「高学歴」にすべてあてはまるので、「親の介護」意識が高いということである。

先にも述べたが、本研究の調査対象者は、一般的な若者の意見を代表しているとは言い難い。地方国立大学を卒業して教員になる「地方エリート」で、親の職業から推測するに、経済的には困っていない者である。また、祖父母からの影響が強いということで、社会関係資本としての家族のつながりが豊かともいえる。ということで、様々な意味で、若者の一般的な状況や意識ではなく、「上層階層の意識」という面がある。そのような一部の層の意識であるということをもふまえた上で、これが福祉レジームにおける「家族主義」とどう関連するのかを、最後に考察しておきたい。

福祉レジームの「家族主義」への批判は、家族のケアが女性に集中して、男性は外で働くという規範への批判という面がある。たしかに、イエ制度は男性が家長となり、権力を握るという性格を持っている。しかし、本調査で明らかになった大学生が持つ「祖父母から伝えられたイエ意識からくる介護への積極的な意識」を「欧米諸国に比べて遅れている。このような意識はなくしていくべきだ。」と言い切れるのであろうか。先祖代々から続く家族の絆に重きを置く

ということと、男性優位の価値観ということとは、重なりあう面もあるが、別のことだとも考え得る。すなわち、男性と女性が平等な立場で築きあげていく現代的な「イエ」も考え得るのである。

結局のところ、「イエ」「家族」「介護」の定義や概念の更なる精緻化が必要であり、意識を持つことと、実際に介護を担うことは別のことになるので、具体的な方策につながる議論にもなっていない。しかし、「イエを継ぐ、守る」という規範意識があるからこそ、大学生が地元に戻ってきて教員になるのである。「地方エリート」である教員が非大都市圏に定住し、家族のケアをすることは、非大都市圏にとっても悪いことではないであろう。家族主義を単に否定的にとらえるだけではなく、イエ制度を現代的に変革していくという視点が、必要であろう。

<参考文献>

- 阿部誠 2017 「地方圏の若者はどのようなキャリアを歩んでいるのか」石井まこと、宮本みち子、阿部誠編『地方に生きる若者たち インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社, pp.85-128.
- 天野郁夫 1986 『高等教育の日本的構造』玉川大学出版部.
- 羽濑一代 2016 「現代的イエ意識と地方」川崎賢一・浅野智彦編著『<若者>の溶解』勁草書房, pp.85-109.
- 朴澤泰男 2016 『高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動』東信堂.
- 榎田大二郎・榎田有一郎 2018 『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト —地域人材育成の教育社会学』明石書店.
- 細江容子 1987 「親の老後に対する大学生の扶養意識」『老年社会科学』vol.9, pp.96-108.
- 石倉義博 2009 「地域からの転出と「Uターン」の背景 —誰がいつ戻るのか」, 東京大学社会科学研究所・玄田有史・中村尚史編『希望学3 希望をつなぐ 釜石からみた地域社会の未来』, 東京大学出版会, pp.205-236.
- 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子 2012 『「東京」に出る若者たち —仕事・社会関係・地域間格差—』ミネルヴァ書房.
- 吉川徹 2001 『学歴社会のローカル・トラック：地方からの大学進学』世界思想社.
- 轡田竜蔵 2017 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房.
- 三浦展 2010 『ニッポン若者論 —よさこい、キャバクラ、地元志向』ちくま文庫.
- 宮本みち子 2017 「若者の自立に向けて家族を問い直す」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社, pp.57-82.
- 中西泰子 2011 「老親扶養規範意識と地域特性 —地域の家族構造が及ぼす影響について—」日本家族社会学会全国家族調査委員会『階層・ネットワーク』(第3回家族についての全国調査第二次報告書 第4巻), pp.99-110.
- 日本家族社会学会全国家族調査委員会 2010 『第3回家族についての全国調査 (NFRJ08) 第

一次報告書】。

難波功士 2012 『人はなぜ<上京>するのか』日本経済新聞出版社。

落合恵美子 2015 「日本型福祉レジーム」はなぜ家族主義のままなのか-4 報告へのコメント』『家族社会学研究』27(1), pp.61-68.

下夷美幸 2015 「ケア政策における家族の位置」『家族社会学研究』27(1), pp.49-60.

新川敏光編著 2011 『福祉レジームの収斂と分岐：脱商品化と脱家族化の多様性』ミネルヴァ書房。

鳥取大学地域学部ホームページ <http://www.rs.tottori-u.ac.jp> (2018年9月30日アクセス)。

- i 具体的には、「少子高齢化」「非婚化による単身世帯の増加」「ひとり親家庭の増加」などである。
- ii この「親子関係の規範が弱まっている」という指摘は、何を根拠としているのか、また規範の内容はどのようなものか、明らかになっていないところに、難点がある。
- iii 調査のデザインの詳細については、日本家族社会学会全国家族調査委員会 (2010)、pp.5-30を参照のこと。
- iv この集計値は、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから提供を受けたものである。
- v この変数の作成方法は、以下のとおりである。家族に対する規範意識の質問を因子分析にかけた結果、介護についての質問と、「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」「年をとって収入がなくなった親を扶養するのは、子どもの責任だ」の質問が、同一因子を形成していること因子分析の結果としてわかったので、この3つの質問の回答結果の主成分分析を行い、その主成分得点を「老親扶養規範意識」の変数とした(中西 2011)。
- vi 「ご都合主義的」とは、その人の都合がいい時だけ介護をするという意味である。
- vii ここで、教員と保育士を同列に並べることは、両者の地位や収入などの社会的ステータスからして、やや難があるかもしれない。しかし、教員養成に携わる大学のカリキュラムやキャリア支援において、幼稚園教諭と保育士は同列に並べられることが多いので、本研究でもそのように扱っている。
- viii 2018年度学校基本調査速報値より
(<https://www.e-stat.go.jp/stat/search/file-download?statInfId=000031738712&fileKind=0>、2018年9月30日アクセス)。なお、東京都は138校、大阪府は55校の大学があり、顕著な差がある。
- ix 2014年度に鳥取大学地域学部に入学者のうち、鳥取県出身者は59名(28.2%)である。
(<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/faculty/system/index.html>。2018年9月30日アクセス。)母集団においても県内出身者の割合は少ないが、本調査の調査対象者においてはさらにその割合は少なくなる。
- x <http://www.rs.tottori-u.ac.jp/faculty/career/index.html>を参照のこと。2018年9月30日アクセス。
- xi この学生が就職先として鳥取を選んだ理由は注目される。インタビューでは回答があったが、「詳細は記述しないでほしい。論文等に記載される場合は『将来のことを考えて』という文言にしてほしい。」という依頼があったので、ここでは扱えない。